2024 新幹線延伸

変わる北陸

残り半年の光と影 ①

海外富裕層に特別な旅を

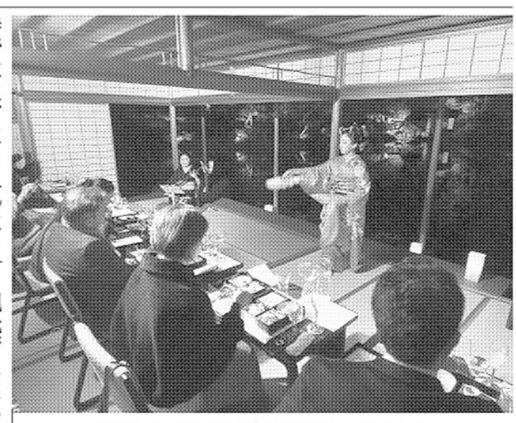
「素通り」阻止へ誘客策

北陸新幹線の金沢―敦賀間が2024年3月16日に開業する。東京―福井間は初めて3時間を切り、首都圏とのアクセス向上による交流人口の増加などがもたらす経済効果に地元の期待は一段と高まる。一方で、人手不足や物価高が受け入れ態勢を整える妨げになる懸念も増している。延伸まで残り半年。ラストスパートに入った北陸3県の「光」と「影」を追った。

永平寺で禅の世界に触れ、人間国宝の紙すき作業を見た後は、かつての大名が愛した庭園を眺めながら夕食を堪能――。福井県に息づく日本の伝統と美を凝縮したツアーを、海外の富裕層向けに提供する準備が進行している。

事業を企画するクラフトパートナーズ(福井市)は、21年と22年に2度のモニターツアーを実施。県内の観光素材とのネットワークを整えた。永平寺では通常なら入れない場所を紹介する特別拝観を実現。産業ツーリズムでは、国の伝統的工芸品である和紙、漆器などの産地と協力関係を構築した。福井藩主松平家の別邸の養浩館庭園も管理者の福井市から日本舞踊を見ながら日本食を体験する場に使う了承を得た。

新型コロナウイルス禍にもかかわらず、モニターツアーには計10人以上の外国人が参加し、評価は上々だった。吉川健彦社長は「知的好奇心に訴え、満足度を高めれば収益化は可能」とみる。



福井市の養浩館庭園で、海外の観光客がかつての大名と同じ景色を見ながら食事を楽しむ

観光庁によるインバウンド（訪日外国人）の消費動向調査によると、コロナ禍前の19年に福井県を訪れた外国人は6万4000人だった。北陸3県では石川県（59万9000人）の約1割、富山県（34万2000人）の約2割にとどまり、全国順位は46位のブービー。日本観光の代表的な移動ルートである京都―金沢間に位置しながら「素通り」されてきた。延伸効果を高めるにはインバウンドの取り込みが重要課題だ。

北前船の寄港地として栄えた三国湊がある福井県坂井市でも、海外の富裕層を意識した取り組みが進む。NTT西日本を中心に福井県の企業など計11社が出資するActibaseふくい(同市)が、12億円の事業費をかけて点在する古民家をリノベーションし、10棟18室のホテルとレストラン1棟を整備する。街並み全体を分散型ホテルに見立てたオーベルジュ（宿泊施設付きレストラン）として24年1月に開業する。

北前船で栄えた三国湊に古民家をリノベーションしたホテルを整備する

レストランにはフランス料理の著名なシェフ、吉野建氏を招き、県内の最高の食材を使った料理を提供する。一方で「メジャーな観光地では味わえない地域ならではの価値観をアピールする」(樋口佳久社長)。古民家ホテルは外国人の長期滞在に適した内装に一新しつつも、玄関に特産の笏谷石（しゃくだに）を敷き詰めるといった工夫も凝らす。1泊5万円程度で年1万人の集客が目標だ。

観光バスが主力の丸一観光(石川県七尾市)は、新事業に乗り出した。マイクロバスを8人乗りに改装。高級感ある黒塗りの車体にしたほか、飛行機のファーストクラスの座席を手掛けるメーカーの特製シートや、車窓の景色を見やすくする床上げといった装備に1台あたり1100万円を投じた。

金沢市と石川県七尾市に配備した計5台の車両を活用し、同社が計画するのは「地産地消」のストーリーで能登の魅力を紹介するツアーだ。農産物の収穫で1次産業、陶芸やガラス製品の制作で2次産業を体験し、得た食材と食器を使った食事で3次産業に触れてもらう。

能登には金沢―敦賀開業で逆風も吹く。延伸に伴い、大阪駅と七尾市の和倉温泉駅を結ぶ特急サンダーバードが運転を終了。関西、中部から能登地域に向かうためには敦賀と金沢で乗り換えが2回必要になり、客足への影響が懸念される。木下恒喜常務は魅力的なツアーを企画して「能登の交流人口の増加や観光消費の拡大に貢献し、新幹線延伸のマイナス作用を和らげたい」と話す。

日本政策投資銀行が22年11月に公表した調査では、北陸新幹線の延伸について首都圏で55%が「知らない」と回答した。15年の金沢開業後も首都圏における北陸の認知度は低く、その背景には発信力の弱さがある。若者の流出などによる人口減もあって「要求水準に対応できる通訳の確保など課題は多い」（クラフトパートナーズの吉川社長）。期待を現実に変える取り組みはまだ始まったばかりだ。（沢田勝）

許諾番号30095445　日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。
掲載日 2023年09月21日 日本経済新聞　地方経済面 北陸 © 日本経済新聞社 無断複製転載を禁止します。